



Title	尺八古典本曲の研究
Author(s)	月溪, 恒子
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3169605">https://doi.org/10.11501/3169605</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 つき ぎ ぎ 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 5 5 6 1 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 12 年 3 月 24 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 尺八古典本曲の研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 山 口 修

(副査)

教 授 根 岸 一 美 教 授 天 野 文 雄

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、作曲や伝承の点で無名性と無記性を特徴とする尺八の「古典本曲」において、個々の楽曲が生成・変化していった「しくみ」を解明し、その「思考のモデル」を提示する音楽史学研究である。まず、琴古流の書記史料によって、十八世紀末から十九世紀前半における本曲形成の実態と演奏慣習を明らかにしたうえで、緻密な楽曲分析を通して既成の楽曲から新たな楽曲が生みだされる「しくみ」や、楽曲の構成方法、伝承における変化と楽曲の同一性の問題を論じている。そして、古典本曲の生成の多様性は、不可逆な変化の過程の結果であると結論づけている。

日本には、七世紀後半から奈良時代前半にかけて中国の唐から雅楽の尺八（六孔の尺八）が伝来し、この種をはじめ、大別して五種の尺八が盛衰した。本研究の対象となる尺八は、十五世紀末ごろから有髪の乞食僧である薦僧と結びつき、十七世紀以降は虚無僧へと移行した人びとによって吹かれた五孔の尺八、すなわち「虚無僧尺八」の流れをくむものである。「尺八古典本曲」という術語には、担い手である虚無僧の組織であった普化宗（臨済宗の一派）が、明治四年（1871）に廃止されるまでの約二百年間、普化宗の「修行」として吹き伝えられてきた楽曲、という意味がある。ここには、一月寺・鈴法寺という虚無僧寺を母体に生まれた江戸の琴古流本曲や、京都の明暗寺をはじめ、奥州地方や九州地方などの虚無僧寺を拠点に活動した虚無僧たちの吹き伝えた本曲が含まれる。しかし、明治の廃宗以後に誕生した都山流（1896年創流）、上田流（1917年創流）、竹保流（1917年創流）などの、新たに作曲された近代の本曲は、使用する楽器の内部構造とその音楽の出所の違いから、この研究の対象から除外される。

論文は、第一部「尺八古典本曲の史料とその解釈」（第一章～第三章）と第二部「尺八古典本曲の生成と変化」（第四章～第六章）に分けられている。第一章「尺八研究の歴史」で、尺八研究における本論文の位置づけをかねて、従来の研究と基本文献を厳密に吟味したうえで、第二章「琴古流の成立をめぐる諸問題」では、琴古流の成立に関わる従来の記述が批判的に検討される。第三章「琴古流本曲の形成と展開」は、「史料から音楽の実態をどこまで明らかにすることができるか」を問うものである。

第二部は、音楽資料の分析研究である。まず第四章では、「どのようにして曲はできあがるか」がテーマとなる。この考察対象として、樋口対山（1856～1914）の曲目制定および旋律改編の軌跡が取り上げられる。第五章「楽曲の構成」では、楽曲の作られ方を旋律の最小単位（音句）、中単位（楽句）、大単位（段／段落）に分けて考察し、古典本曲における「楽曲分析の方法論」と「楽曲構成のモデル」が提示される。古典本曲には決まった形式がないといわれてきたが、その本曲にも、旋律を作りあげるための「見えない法則」があることを実証的に示している。

第六章「伝承と変化」では、伝承の過程において古典本曲がどのように変化してきたか、その変化の実態を明らかにするものである。第一節では、「変化の要因」と「変化のレベル」（曲名、奏法、旋律）を指摘したのち、《鶴の巢籠》と《阿字観》の楽曲を事例に、古典本曲における伝承形態の典型を提示している。第二節では、変化した結果として個別に存在する多数の楽曲の間の「同一性」identityがテーマとなる。複数の帰属関係をもつ《秋田菅垣》という楽曲は、その帰属の一つである琴古流の奏法によって強く支配されている。しかし、旋律構造というもっとも変化を受けにくい特性において、この曲本来の帰属が、奥州地方の伝統である「山型形成型」の旋律構造にあることを主張している。そして第三節では、ひとたび変化し枝分かれした楽曲は再びもとに戻らないという、伝承の不可逆性を指摘し、古典本曲における楽曲の生成の多様性が、こうした不可逆な過程の結果である、と結論づけている。

（分量 本文199頁 400字換算約597枚 付録等51頁）

### 論文審査の結果の要旨

日本の楽器のなかで群をぬいて国際化した尺八は、江戸時代において楽器ではなく法器とみなされていた歴史的社会的脈絡ゆえに、その歴史の初期について謎が多く、史料も限られている。その意味では、散在する断片的なデータを長年かけて収集し、多角的に分析して歴史の一端を明確に示したことの意義は大きい。それは、音楽的な知識が文字として書き記されるよりもむしろ、身体操作の記憶や音楽的表現の同一性の保持や逸脱といったかたちでこそ伝承される度合いが高いことに着目することによって可能となった。まさに音楽史学のモデルとなる有意義な研究である。また、こうした大きな把握のみならず、細部においても一次史料に分析的な操作をくわえることにより、歴史の一端を髣髴と語りかけてくるかのような二次史料（資料）を多量に提示しているので、別の視点から活用し得る可能性を残しており、論文の付加価値を高めている。

ただし、本論文にいくつかの短所も見受けられることも否定できない。たとえば、たとえ宗教的な脈絡においてはあっても「芸術的」あるいは「美学」に関わるような情動表現の要素が大きくはたらいっていたと推定されるにもかかわらず、徹底して即物的に分析の手をくわえてしまったために、音楽の生き生きとした印象が伝わってきにくいのである。また、他の楽器や日本音楽全体とくらべて特異な歴史をたどったことを指摘しておきながら、具体的にどのようなずれがあったのか、それが現代における隆盛と関連があるのか、といった疑問が残る。

しかしながら、これらの短所は本論文に続くものとして補われてゆくべき性質のものであり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。本論文は、一種類の楽器とその音楽を対象としてフィールドワークの手法を盛り込んだ音楽史学研究として従来水準を超える優れた論考である。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。